

2nd Futures Session

エイジング・ソサエティ × ベッドタウン

— Mon 1st October 2012



Overview

問題意識

都市通勤への利便性を持つ一方、「寝に帰るだけの町」がその名の由来でもあるベッドタウン。ベッドタウンは和製英語であり、英語ではコミュータータウンなどと呼ばれています。ベッドタウンはこれまで、戦後の経済復興や成長を支える重要な役割を担ってきました。そして、このような歴史的背景や機能性は日本だけでなく英国のそれにも当てはまります。

しかし、近代から現代にかけての工業化・都市化への偏向という「若さ」に立脚した価値観は、変曲点にさしかかっているのではないのでしょうか。そしてもしそうであるならば、高齢化していく都市の機能にも大きな変化が生まれてくると言えるのではないのでしょうか。都市近郊という人口の大きな部分の変化は、地域やコミュニティ

を考える上でも、社会的にも大きな意味がありそうです。

都市近郊の象徴的なものとして、これからのベッドタウンを Futures で考えることは、高齢化社会における都市機能の再設計や、企業や行政の新しい機能・活動の発見をもたらすのではないかと考えました。そこで「エイジング・ソサエティ × ベッドタウン」をテーマに、Futures として第 2 回目のフューチャーセッションを 2012 年 10 月二子玉川のカタリスト BA にて開催しました。企業、地方自治体、社会起業家、NPO など、様々なセクターから 37 名が参加しました。

今回のフューチャーセッションは、ベッドタウンに住む人々の生活を支えるインフラに関心をもつ富士通研究所にオーナーシップをとっていただき、その他のホストメン

バーと共に、セッションの目的やコンテンツ等を決定し実施しました。富士通研究所では、2009 年に研究所 10 年ビジョン「ヒューマンセントリックなネットワーク社会の実現」を提示しました。高齢化社会と相まって、大きな社会的な変化が人口の大部分を占める都市部で起きるとするならば、それがどのような可能性をはらむものなのか、富士通研究所にとっても、人々の生活を社会インフラとして IT で支える富士通にとっても大きな関心事となります。

目的

既存ベッドタウンが抱える課題のほか、これからの時代に求められる新しいベッドタウンの姿について考え、高齢化社会とベッドタウンの関係性やその役割、求められる機能を考察しました。

フューチャーセッションのプロセス

大きなステップとして、以下のプロセスでセッションを実施しました。

Stage1 ゲストによる新たな視点のインプット (英国のベッドタウン事情)

日本というコンテキストとは違う部分から光を当てる

Stage2 「ベッドタウン」を自分視点で考える

参加者各自のコンテキストを他者と共有することで新たな気づきを得る

Stage3 「ベッドタウン」を社会視点で考える

すでに起きつつある「変化の兆し」から、今までとは異なるコンテキストの未来を描く

Stage4 「ベッドタウン」を再構築する

未来からバックキャストに考え、今起こすべき具体的なアクションを描く

それぞれのプロセスについて、そしてそのプロセスで何が生み出されたのか、少し詳しく見てみましょう。

Stage 1 : ゲストによる新たな視点のインプット (英国のベッドタウン事情)

ブリティッシュ・カウンシルから、英国のベッドタウン経験をもつヒュー・オリファントさんとトム・メイズさん、そして英国と日本のベッドタウン経験をもつサステナブルデザイナーであり、トリプルボトムライン主催の柳澤 郷司さんの3名で、英国のベッドタウン事情について対話していただき、成功しているベッドタウンのお話や、ベッドタウンが直面している問題を共有していただきました。(※表1、2参照)

直面している問題などは、英国のベッドタ

成功している英国のベッドタウンの要因	事例
コミュニティスピリットを育成	人をつなげるハブ (地元の店、Pub、コミュニティセンター、スポーツチーム)
ローカルならではのスペシャリティに着目	スーパーによる利便性とローカルのスペシャリティの共存 (スーパーでは買えないジビエを地元の店で提供)
お互いが気軽に声を掛け合える環境	商店街の重要性、英語での挨拶言葉の気軽さ
働く場所の存在	交通機関の充実、労働環境の柔軟性 (労働者の裁量権が高い)

表1: 成功している英国のベッドタウンの要因

英国のベッドタウンが直面している問題	その原因
コミュニティスピリットが低下	ショッピングモールが進出し、地元の店がなくなり、みんなが交流できる場がなくなっている
高齢者の外出するモチベーションが低下	高齢者向けのモビリティが不足している、不況で公共施設 (トイレ、図書館など) への支援ができなくなってきている⇒回避策として学校の送迎バスを住民に解放、ファーマーズマーケットを実施している地域もある

表2: 英国のベッドタウンが直面している問題

ウン事情と日本のベッドタウン事情はかなり似ているという示唆を得ました。また、地域の自治に関しては、日本には「祭り」などが残っている地域があり、日本の方がうまくいっているというコメントをいただきました。

Stage 2 : 「ベッドタウン」を自分視点で考える

それぞれ各自が時間を取って、参加者自身とベッドタウンの関わりを年表にしてもら

いました。その年表をもとにペアインタビューを行い、お互いがベッドタウンとどのような関わりを持っていたか、これからどう関わっていきたいか対話しました。参加者同士の対話を通じて、自分視点のベッドタウンストーリーが生まれました。



Stage 3 : 「ベッドタウン」を社会視点で考える

事前に準備していた 75 個のソーシャルイノベーションのニュース (※) を参加者に提供し、各自が気になるものをいくつかマーキングして、グループで共有しました。そこから「未来新聞の見出し」という形で、特に印象の強い社会変化の兆しをとらえました。

例えば、「世界初時間取引市場が開設」「通過の概念が変わりました」「またか！！85歳の起業家続出」など、地域に隠されたリソース活用の兆しが見えてきました。

また、全てのチームの活動をまとめ、提言として発表するというユニークなチームもありました。右は未来新聞の見出しの一覧になります。



1 世界初時間取引市場が開設

金融マーケットと同じように時間マーケットができ、知識・役務・経験を時間で売り買いできるようになる。

2 楽しいシェアを実現 地域住民が憩う Open Living

候補になる家を生前に登録。利用者が共同で運営し、地域住民が集まる縁側へ。

3 ネット購入社会の上限設定化

ネットだけでなく地場のお店で購入することを促進。これに反発したグループが訴訟！

4 異業種合併が流行

第二のストーリーがあるモノ・コトづくりを目指す。自分事がみんなのコトでもある時代へ。

5 またか！！85歳の起業家続出

高齢者の知恵をアウトプットできる新たな製品の開発に成功。知恵から新しい製品、開発技術が次から次へと生まれてくる。

6 世界最大のシェアハウスチェーン 日本企業が時価総額世界 No.1 に

世界 45 のユニークかつニッチな地域にシェアハウスをオープン予定。日本国内の 350 のシェアハウスの魅力が世界のワーカーをとりこに。真のノマドワーカーが日本で働く時代に (年間 2000 万人越え)

※ノマドワーカーとは、自宅や会社のオフィスではなく、喫茶店やファストフード店などで、ノートパソコンやタブレット端末などを使って仕事をする人のこと (goo 辞典より)

7 通貨の概念が変わりました

経験、ノウハウ、知識、情報、知恵などが通貨の代わりになり、得意なことを活かしたり、隠れたリソースを活用したりすることができるようになる。

8 学校がすべての人の暮らす拠点に！

少子高齢化で増えた廃校を活用し、地域の多世代の人が集まれる場所へ。子どもは学校で学び、子どもを預けた親はそこで働き、時間の余っているシニアは教師役になっている。

9 強制的コンパクトシティ

半分強制的にコンパクトシティを実践する。人口が多いところは無理矢理減らし、少ないところは無理矢理増やす。

10 通勤時間が激増 10年で150%アップ

通勤こそ富の源である。通勤時間を人と人が出会う場所にしていこう。移動こそ出会いの場だ！というコンセプトのもと、朝活トレイン、ランニングステーションの設置などを実施する。

未来新聞の見出し

Stage 4 : 「ベッドタウン」を再構築する

これまで、Stage 2 では自分自身のベッドタウンストーリーを、Stage 3 では未来新聞の見出しを作成してきました。これをもとに、「私がベッドタウンで起こしたいチャレンジ」と、「そのチャレンジがうまくいくと、そのベッドタウンはどうなりますか?」という問いについて、参加者各自が内省しました。そのアウトプットを壁に張り出し、似ているものを寄せて 9 つのグループに分かれ、ベッドタウンの再構築について対話し、グループで起こしたいアクションを検討しました。プロジェクトのタイトル、ネクストステップとしてのアクションアイテム、各自の役割を決め、全体に共有しました。

空き家や空いた子ども部屋といった地域に隠されたリソースを活用して、宿泊スペースにしようという「ソーシャル出張 - 空き家リゾートテーマパーク」というプロジェクトが提案され、すぐに物件を探しにいくというアクションアイテムを策定したグループがありました。また、シェアハウス型高齢者住宅と社会貢献事業をセットにして生き甲斐を提供する「未来型高齢者住宅 - ピンピンコロリ、高齢者に生き甲斐をー」というプロジェクトからは、既存の老人ホーム視察や入居者ニーズを調査するというアクションアイテムが出てきました。右は創出されたプロジェクト一覧になります。

1 未来型高齢者住宅 - ピンピンコロリ、高齢者に生き甲斐をー

シェアハウス型高齢者住宅と社会貢献事業（低価格託児所、独居老人出張介護）をセットに健康な食生活、適度な運動、趣味など生き甲斐を提供する。

- アクションアイテム

調査（既存の老人ホーム視察、入居者ニーズ意識調査） / コンセプト作り、事業パートナー集め / 事業計画策定

2 Pub Tree 突撃！隣の溜り場

様々な異業種の人がホストになって他のメンバーをゲストとして招待する。世代間でコミュニティを作り、地域特有の溜り場を案内する。

- アクションアイテム

メンバーの連絡先を交換。最初のホストを決める。

3 街の誇りプロジェクト

住民がばらばらで、単なるねぐらなのがベッドタウンの課題。地域のコミュニティを強化することで課題を解決する。

- アクションアイテム

国立の公民館、地産地消プロジェクトを見に行く / たまプラーザの街づくりワークショップ見学 / 報告レポート作成

4 (株)ベッドタウン計画

ベッドタウンの問題を事業（ビジネス）で解決する。人と人との関係性を構築するコミュニティビルディングだけでなく、コミュニティの抱える問題を事業で解決することを目指す、コミュニティ起業を増やしていく。

- アクションアイテム

(株)ベッドタウン計画を実現する上での、必要なルールを作る。

5 墨田区コミュニティの元気応援団

既存コミュニティ組織（町会、お祭りなど）が高齢化、役員不足でピンチの状態。新しい力（新しい住人）を既存のコミュニティにどう導入するのか、30-40代など若い世代の住人が、今からどうコミュニティと関わることができるのかが重要。

- アクションアイテム

4人のメンバーの地域状況を共有し、共通の課題や必要な取り組みなどを分析する。

6 分断しない家族づくりプロジェクトー多世代の交流ができるタマリバを作ろうー

多世代が交流していないのがベッドタウンの課題。多世代が交流できるタマリバをつくり課題を解決する。住み続けられるような仕組みを考えていきたい。

- アクションアイテム

地元の人たちの話を聞き、どうすれば多世代が交流できるような場所をつくれるのか考える。

7 ソーシャル出張 - 空き家リゾートテーマパークー

空き家の活用、コミュニティ形成、やりがい作りがキーワード。空き家や空いた子ども部屋などの空きスペースを宿泊施設にする。企業のCSRの一環にできないか検討したい。

- アクションアイテム

物件公募 / 体験のバリエーション収集 / 企業の出張情報収集 / Webサイトを立ち上げ情報発信

8 働く場所・くらす場所を自分でデザインできるようにプロジェクト

ベッドタウンは、働く場所とくらす場所が分断している。職住が分かれているのが「良い/悪い」ではなく、自分でデザインできるようにすることがポイントとなる。

- アクションアイテム

勤務地トレードを実施（お試して1週間だけオフィストレードしてみる） / カウチサーフィン体験（旅行に行ったときにカウチサーフィンで宿泊してみる）

※カウチサーフィンとは、インターネット上の無料国際ホスピタリティーコミュニティであり、海外旅行などをする人が、他人の家に宿泊させてもらうという形式の、相互的な思いやりや信頼による制度（Wikipediaより）

9 LIQUI - CITY

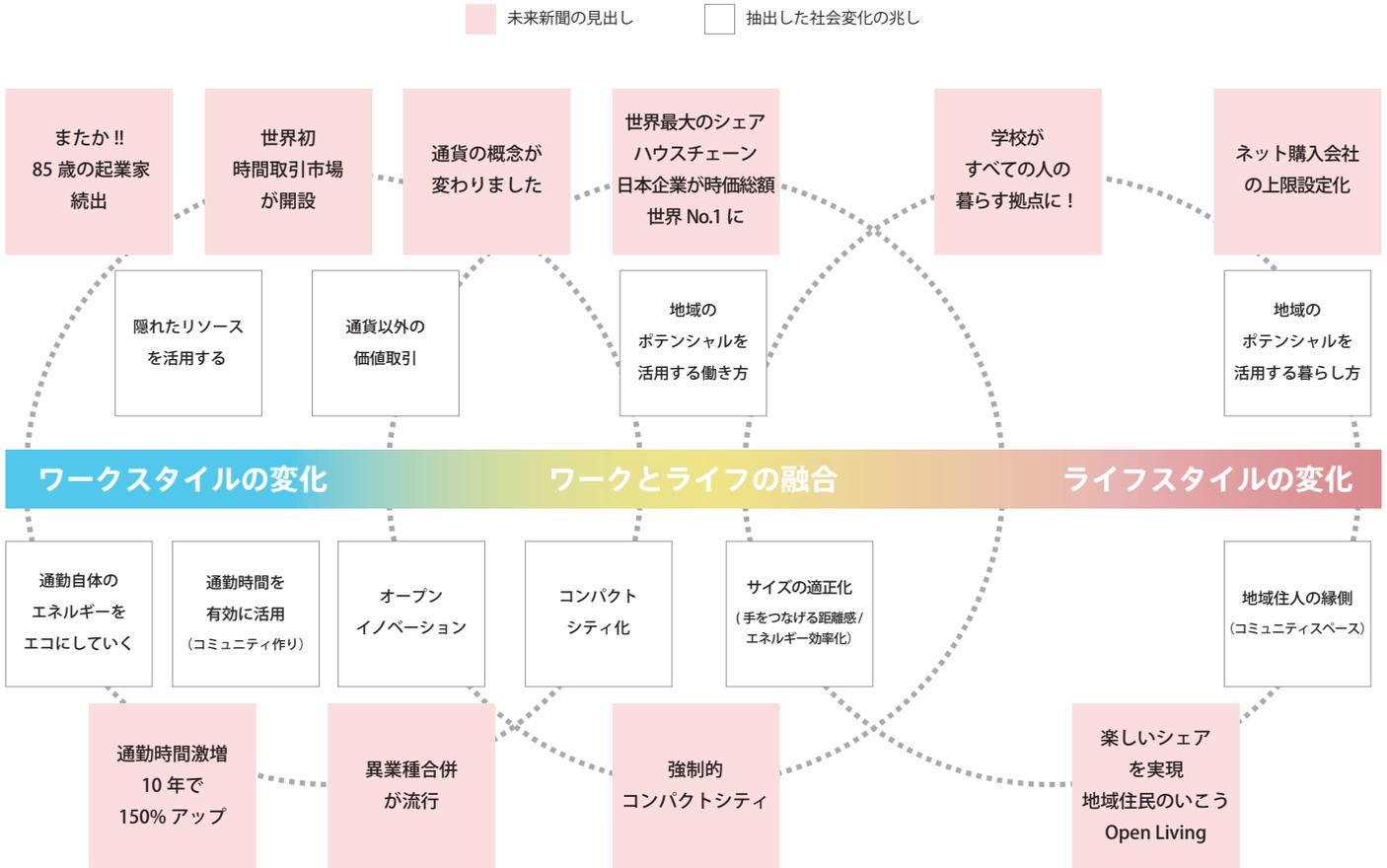
帰ってきて寝るだけのベッドタウンを、魅力的な街にする。多様な人が集まり、ナレッジが集まる、ユニークである街（Diver - CITY）。人が行ききし、ナレッジが共有化され、コワーキングなどが広がる街（Univer - CITY）。それらの要素が流動的に交差する LIQUI-CITY を目指す。

- アクションアイテム

神楽坂をモデル地域へ。神楽坂のバブを貸し切り、ゲストを呼んで LIQUI - CITY のイベントをする。

Spotlight

図1：「ベッドタウン」を社会視点で考える — これからの変化の兆し —

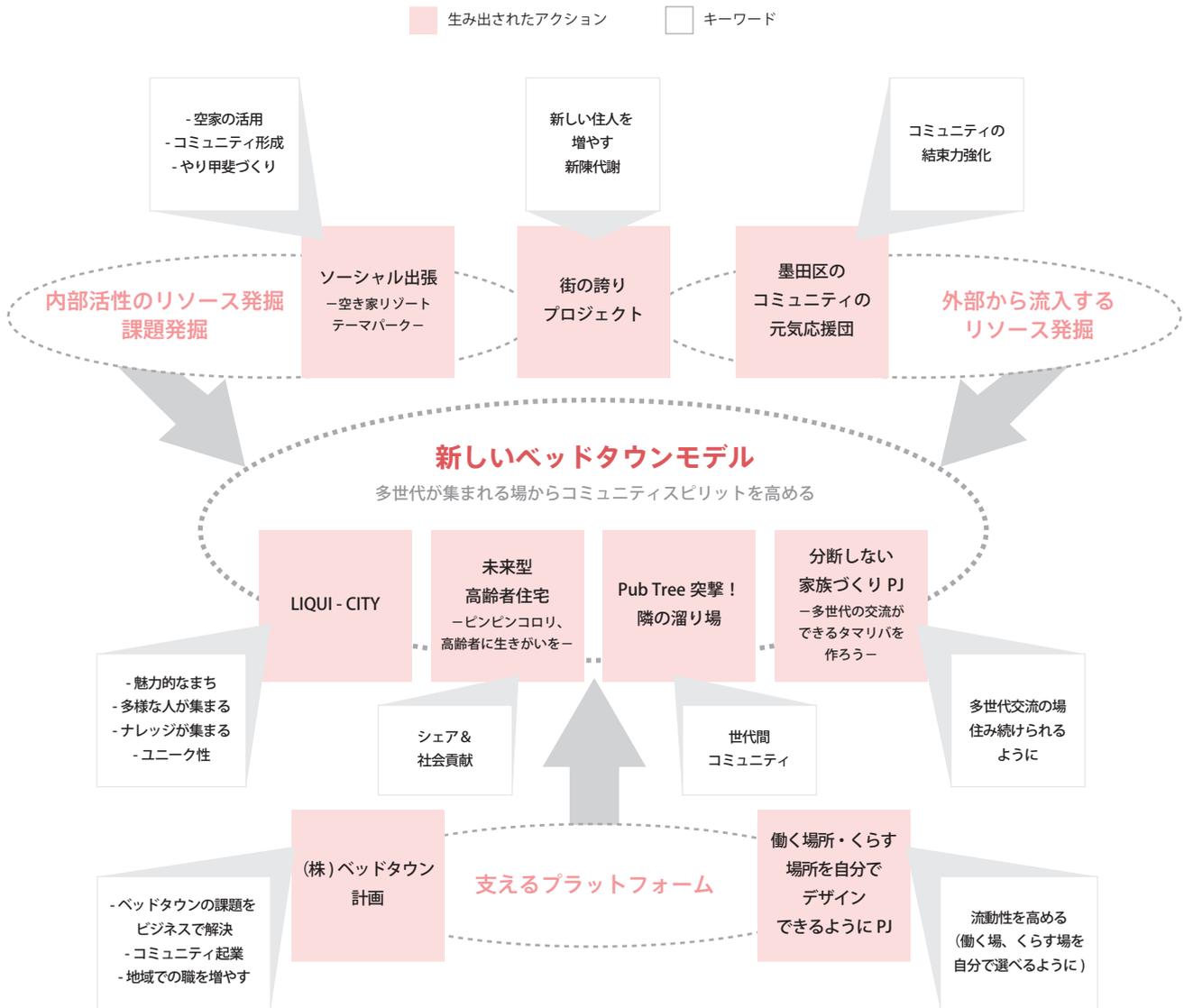


未来新聞の見出しの背後にある社会変化の兆しには、ワークスタイルの変化とライフスタイルの変化、そしてその融合領域がみてとれました。参加者は、ワークスタイルもライフスタイルも変化するのではない

か / 変化せざるを得ないのではないか、と意識しているということが読み取れます。(※図1参照)



図2：「ベッドタウン」を再構築する ベッドタウンで起こしたいプロジェクトと全体像



各グループのベッドタウンで起こしたいプロジェクトからは、「内部の活性化」と「外部との関わり」を両立し、多世代が集まれる場からコミュニティスピリットを高めるという「新しいベッドタウンモデル」、そしてそれを「支えるプラットフォーム」が見えてきました。(※図2参照)

今回のフューチャーセッションで生まれたアウトプットは、それぞれのプロジェクトが連携することで、新しいベッドタウンが生まれる可能性を感じることができます。この新しいベッドタウンに関わる事業と、今後のフューチャーセッションを重ねることで創発される事業群が連携することで、

どのような高齢化社会を実現していくことができるのか、今後 Futures のセッションを通して、みなさんと一緒に描いていきたいと思います。



デザイン : hereticanthen co.,ltd.

発行 : プリティッシュ・カウンシル / 株式会社富士通研究所 / 国際大学グローバル・コミュニケーション・センター (GLOCOM) / 株式会社フューチャーセッションズ

2012年12月1日発行 本書の無断複写・複製・転載を禁じます

© 2012 British Council, Fujitsu Laboratories Ltd., Center for Global Communications, International University of Japan, Future Sessions



G L O C O M

